

古代建築の大棟中央飾り

—平城宮大極殿の復原研究—

はじめに 平城宮大極殿正殿復原に当たっては、これまで復原のためのさまざまな調査研究がおこなわれてきている。本稿で取り上げる屋根大棟中央飾金具もそのひとつで、大極殿正殿復原では、大棟の中央に宝珠形の飾金具が掲げられる。しかし、これまで平城宮跡からは大棟中央飾金具の出土例がない。そのため、奈良時代前後の事例および資料の収集調査を通じ、この金具の意匠設計を進めざるを得なくなっている。ここでは、中国における屋根中央飾りの資料調査を元に、とくに形状の変遷に注目するとともに、その飾りが持つ意味について考察する。

中国古代建築における大棟中央飾りの変遷 中国古代建築における大棟中央飾りの変遷を推測する手段として、出土物、石窟、絵画等の資料を調べた結果、つぎのような傾向をみることができる。

まず紀元前後から隋までの大棟中央飾りは、鳥形（鳳凰または朱雀）であり、一部三角形の火焔形を併用する場合がある。その後時代が進むにつれて次第に宝珠形の中央飾りに変わっていく。古代中国における鳳凰の図像は表現に差異があるうえ、収集した図像の多くは建物の屋根飾りとしての大雑把な表現となっている。したがって、これが鳳凰か朱雀であるかの同定は不可能であった。鳥型は鳳凰または朱雀の総称として使用した。

ところで、鳳凰は古代中国の伝説の鳥であり、殷時代には風の神、あるいはその使者として崇められていた。春秋時代には、瑞兆として「詩経」「春秋左氏伝」「論語」等に天子が正しい政治をおこなった際に現れると記されている。その後、五行思想の流行により朱雀と同一視されるようになる。

いずれにせよ有力者の象徴として鳳凰は使用されているが、今回とくに注目された点は、隋以前では仏殿やストゥーパ（塔形ではなくインドのストゥーパ形）とわかる建物にもこの鳥形が使用されていたことが把握されたことである。

宝珠形と蓮華形 つぎに平城宮大極殿正殿と対応する時期に中国で主流となる大棟中央飾りの宝珠形は、その形状には火焔・光明のあるなしなども含め、多様なデザイ

ンをみることができる。まず、この大棟中央飾りを建物関係に限らず、中国仏教絵画資料等から調べた結果、いわゆる宝珠形飾りはつぎの2種類に大別できた。

- 仏の宝冠および天蓋等には、「玉」と「火焔」の組み合わせ形
- 同時に描かれている建物には、「蓮華」形かまたは「宝瓶」と「蓮華」の組み合わせ形

一方、建物を表している出土遺物、石窟、絵画等を調べた結果、大棟中央飾りで「玉」と「火焔」の組み合わせ形が出てくるのは晚唐以降のようであり、それ以前は蓮華形かまたは「宝瓶」と「蓮華」の組み合わせ形が多いことがわかった。

それではこの「玉」と「火焔」は何を表すのであろうか。古代中国では、「玉」は智慧の象徴で「火焔」はその気を表す。「玉」を願いを叶えるものとして崇める信仰は古代中国に限らないが、これが仏教にも取り入れられて象徴的表現として大棟中央飾りに使用されていると考えられる。

このように、初めは仏の宝冠や天蓋に象徴的に「玉」や「火焔」の組み合わせ形が用いられ、また建物には蓮華形が用いられていたようであるが、晚唐頃からこの使い分けが乱れはじめ、以降建物の大棟中央飾りはそのデザインが多様化していく。

蓮華形のデザインパターン

それではこの蓮華形の大棟中央飾りについて、とくに晚唐以前はどのようなデザインであったのかをみてみると、つぎの2パターンに分かれる。

- 水瓶に蓮の葉・花または蕾が生けられている形
- 蓮の蕾形が蓮弁の上に乗っている形

この水瓶に蓮の花が生けられるモチーフは、古代インド仏教遺跡のレリーフ（満瓶蓮華）でも良くみることができ、これがもとになっていると考えられる。

つぎに蓮の花が蓮弁の上に乗っている構図は、前述の「玉」と「火焔」の組み合わせ形の類型化なのか、または中国仏教絵画のなかで菩提樹が仏や天蓋の上で花を咲かせている構図があることから、菩提樹の花をデザインして建物屋根に乗せたのか、あるいは直接インドの蓮のデザインが入ってきているかのいずれかであろう。形状から見ると、素直に蓮の蕾と考えるのが妥当と思われる。

インドと蓮華 つぎに宝珠の形状を構成していると考え

表3 中国古代の屋根飾り(漢~南宋)

表現種別	建物種別	所在地	年代	屋根形式	中央飾り種別	その他飾り種別
出土画像石	樓閣	河南省	漢	寄棟(四重)	鳥	無し
水閣陶樓明器	樓閣	河南省	漢	宝形(二重)	鳥	鳥
出土陶樓	樓閣	四川省	漢	宝形(三重)	鳥	無し
石棺画像	門		漢	寄棟	鳥	無し
画像石	二対樓門		漢	寄棟(三重)	鳥	無し
画像石墓墓門石刻	屋形、二対樓	河南省唐河県炭窖村	漢	寄棟(屋形・棟)	鳥	無し
出土陶井屋	井戸屋	広州市	東漢後期	宝形	鳥	無し
出土画像石	武(器)庫	四川省新都県	東漢後期	寄棟	鳥	無し
石窟	窟門	山西省大同北魏雲岡石窟第9窟窟門	北魏	寄棟	鳥	大棟火炎形4個鳥二羽及び鵝尾、隅棟鳥
石窟	屋形窟	山西省大同北魏雲岡石窟第9窟前廊	北魏	寄棟	鳥	大棟火炎形4個及び鵝尾、隅棟鳥
石窟	入口屋根	山西省大同北魏雲岡石窟第9窟前廊北壁入口	北魏	寄棟	鳥	大棟火炎形4個鳥二羽及び鵝尾、隅棟鳥
石窟	屋形窟	山西省大同北魏雲岡石窟第10窟前廊	北魏	寄棟	鳥	大棟火炎形4個及び鵝尾、隅棟鳥
石窟	屋形窟	山西省大同北魏雲岡石窟第12窟前廊	北魏	寄棟	鳥	大棟火炎形2個及び鵝尾、隅棟鳥
石窟	屋形窟	山西省大同北魏雲岡石窟第13窟壁面	北魏	寄棟	鳥	鵝尾、隅棟鳥
		"	北魏	寄棟	鳥	鵝尾、隅棟鳥
		"	北魏	寄棟	鳥	鵝尾、隅棟鳥
石窟	窟仏殿形式	甘肃天水麦積山石窟北魏第28窟	北魏	寄棟	鳥	鵝尾
石窟	窟仏殿形式	甘肃天水麦積山石窟北魏第30窟	北魏	寄棟	鳥	鵝尾
石窟	屋形窟	河南洛陽龍門石窟北魏古陽洞浮理雕屋形窟一	北魏	寄棟	鳥	鵝尾
石窟	屋形窟	河南洛陽龍門石窟北魏古陽洞浮理雕屋形窟二	北魏	入母屋	鳥	鵝尾
石窟壁画	宮殿	甘肃天水麦積山石窟第127窟	西魏	寄棟双堂	鳥	鵝尾
石窟	窟仏殿形式	甘肃天水麦積山石窟西魏第49窟	西魏	寄棟	鳥	鵝尾
石窟壁画	仏塔	甘肃敦煌莫高窟第428窟	北周	ストゥーパ(三重)	鳥	鵝尾
石窟	窟仏殿形式	甘肃敦煌莫高窟北周第4窟	北周	寄棟	鳥	鵝尾
石窟	窟仏殿形式	甘肃敦煌莫高窟石窟東崖	十六国~隋	寄棟	鳥	鵝尾
石棺	仏殿形式	調西西安出土	隋	入母屋	鳥	鵝尾
石窟壁画	邸宅(宮殿?)	甘肃敦煌莫高窟第338窟初唐壁画	初唐	入母屋or寄棟?	宝珠	鵝尾
石窟壁画	仏殿	甘肃敦煌莫高窟第321窟中唐壁画	中唐	六角	宝珠	鵝尾
石窟壁画	仏殿	河北敦煌莫高窟第148窟東壁南側盛唐壁画	唐	寄棟	無し	鵝尾
石窟壁画	仏殿	河北敦煌莫高窟第321窟中唐壁画	唐	入母屋	無し	鵝尾
石窟壁画	城門	甘肃敦煌莫高窟唐代壁画	唐	入母屋	無し	鵝尾
石窟壁画	城門	甘肃敦煌莫高窟唐代壁画	唐	入母屋	無し	鵝尾
石窟壁画	城樓	陝西三原唐李寿墓壁画二重子母閣及び城樓	唐	寄棟	無し	鵝尾
石窟壁画	八角斗堂	甘肃敦煌莫高窟唐代壁画中的邸宅	唐	八角	宝珠	鵝尾
石窟壁画	南禪寺大殿	山西省五台李家庄	唐(北宋修理)	入母屋	無し	鵝尾
佛光寺大殿	仏殿	山西省五台豆村	唐(金修理)	寄棟	無し	吻
天台庵大殿	仏殿	山西省平順城東	南宋(唐)	入母屋	宝珠	鵝尾
刻本付図	中門	戒転図経	南宋(唐)	寄棟	無し	鵝尾
"	前仏殿	"	南宋(唐)	寄棟	無し	鵝尾
"	仏說法大殿	"	南宋(唐)	寄棟	無し	鵝尾
"	五重樓(樓閣)一対	"	南宋(唐)	右入母屋、左寄棟	無し	鵝尾
"	三重樓(樓閣)一対	"	南宋(唐)	右入母屋、左寄棟	無し	鵝尾
"	三重閣(樓閣)	"	南宋(唐)	入母屋	無し	鵝尾

られる前述までの「水瓶」や「蓮」の形象は、元々どのような意味があるのであろうか。まずこの意味を仏教発祥の地であるインドに求めてみたい。

インドから最初に中国に仏教が伝わったのは1世紀のことといわれているが、再度インドより大きな仏典流入が起こったのが玄奘三蔵の時代の7世紀である。インドにおいては、長年にわたる仏教の分派・改革活動により上座部仏教、大乗仏教等や、ヒンドゥー教の神や儀式を取り入れた密教などが興っていった。このような流れの中で、ヒンドゥー教より取り入れられた仏教儀式に灌頂がある。これは元々古代インドにおいて、国王の即位や立太子に行われた儀式である。この儀式で重要視されるのが水であるが、この水を入れる容器である水瓶は、その美称として宝瓶と称されている。

またインドの仏教遺跡ではチャクラ、菩提樹と並んで、蓮がモチーフとして好んで使われている。とくに宝瓶に蓮の花が生けられている「満瓶蓮華」は、サーンチーのストゥーパをはじめとして多くの仏教遺跡に見られる。この蓮自体はどのような意味を持つものであるのか。古代インド、アーリア系の民族におけるヴェーダ文献に載っている思想では、世界の大本の姿を水に求め、その水の中から生まれている蓮に「豊饒」「生命力」「宇

宙」という意識を重ね合わせている。この宇宙や生命力といった概念を持つ蓮(蓮華)が、後に仏教の中で仏塔と直接結び付き、形象としての意味が特化されていったようである。

このように仏教の中に取り入れられている蓮や宝瓶は、古代インドの思想的流れの中から出てきているものと考えられる。実際に仏教自体がバラモン教に対する宗教改革的側面を持つところから、その思想的な繋がりがあるということも理解ができる。

まとめ 仏教の教義や儀式には、古代思想に通じる他宗教の教義や儀式が取り入れられており、それが中国に伝わる過程で取捨選択および解釈の変化を受けて日本に伝わっている。宝珠形屋根飾りは、古代インドの権力者となる儀式がしいては仏教に取り入れられ、その表現も仏教が好む蓮華や玉と結び付き、象徴的な屋根飾りに変化していったと考えることができる。それが中国に伝わり、仏殿に限らず建物一般の飾りとして使用された可能性は否定できない。以上のことから平城京大極殿正殿の大棟中央飾金具は、古代中国資料のデザイン的変遷をも含めて見る限り、いわゆる宝珠形と言われる形状の飾金具が乗っていたと考えることができる。

(山田 宏／奈良県・窟寺茂・清水重敦)